

『今月の天候と農作業』

通巻第5640号
6月号
令和2年6月4日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

【予報のポイント】

暖かい空気に覆われるため、向こう1か月の気温は高い見込みです。期間の前半は気温がかなり高くなる見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	20	70
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

<1週目の予報> 6月6日(土)～ 6月12日(金)

前線や湿った空気の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 6月13日(土)～ 6月19日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 6月20日(土)～ 7月3日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

普通作物

◆早期水稻

1 追肥と水管理

コシヒカリは倒伏しやすいので、幼穂長1センチの時期が穂肥の適期です。施用量は収量や食味・品質に影響し、葉色を見て決めます。基肥一発タイプの肥料を使用した水田では穂肥は必要ありません。

水管理は根の活力を維持するため間断かん水を行います。ただし、穂ばらみ期から出穂開花期は、特に水を必要とする時期なので湛水します。16度以下の低温で幼穂が障害を受けるので、気象情報に注意し、低温となる場合は深水にして幼穂を保温します。

2 病虫害対策

いもち病は、気温が上がり曇雨天が続くと発生しやすくなります。穂ばらみ期と穂ぞろい期の防除を基本に、発生時には臨機防除を行います。

カメムシによる玄米検査等級の格下げが毎年多く発生しています。防除情報に注意し、穂ぞろい期とその7～10日後に2回の防除を行います。地域での一斉防除やカメムシが繁殖する畦畔や周辺草地の草刈りを出穂の2～3週間前迄に一斉に実施するのも効果的です。

◆普通期水稻

1 基肥と代かき、田植

基肥は、地力や堆肥の施肥量などから施用量を決めます。

代かきでは、除草剤を効かせるため田面を均平にします。

田植は、栽植密度や苗の掻き取り量、植付け深さなどを調整します。極端な疎植は収量や品質が低下することがあるので注意します。

2 病虫害対策と除草

田植時は、いもち病やウンカ類の予防のために箱施薬を行います。ジャンボタニシが多い水田では、薬剤による防除や浅水管理を行います。

除草剤はラベルの記載内容を確認し、ヒエの葉齢を見て遅れないように処理します。処理後7日間は掛け流しせず止水します。ジャンボ剤はしっかり拡散するよう処理時の水深に注意します。田植同時処理では、薬害の対策として、田面の均平や植付深度、田植後の土の戻りに注意し、田植後は速やに入水します。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆収穫終了後の管理

今月でほとんどの施設野菜は栽培が終了します。次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから次作に向けたほ場準備を行いましょう。

特に、きゅうりではアザミウマ類、トマトではコナジラミ類が媒介するウイルスによる被害が依然として多く見受けられます。

作物がウイルス病に感染すると回復は難しく、草勢の低下等により大幅に収量が低下します。これらのウイルスを媒介するのは、ハウス内に生息するウイルスを保毒した昆虫で、これをハウス外に飛散させると、近隣の雑草に寄生し繁殖するため、次作への感染が懸念されます。ハウス内の作物残渣を持ち出す前に、ハウスを10日間閉めきり蒸し込み処理を行うなど、害虫を死滅させた上で残渣を持ち出すようにします。特にウイルス病が発生したハウスでは、蒸し込みと合わせて周辺雑草の除草を実施します。

◆夏秋果菜類の栽培管理

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢低下や病害虫の発生が予想されます。次の点に留意した栽培管理を行いましょう。

- ① 通路や畦間に滞水しないように、かん水は少量多回数で行う。また、ポリマルチ上に滞水した場合は速やかに除水します。
- ② 着果負担を軽減するため、不良果などを中心に摘果を行います。
- ③ 追肥は1回当たりの窒素分量を少なくし、窒素過多にならないように注意します。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図る。
- ④ 摘葉や整枝・誘引を適期に行い過繁茂を防ぎ、通風や採光を良くします。
- ⑤ 風の通りを良くして、葉の濡れ時間を短くします。
- ⑥ 集中豪雨等に備えてほ場の周りに排水溝を掘るなど、排水対策を十分に行います。

曇雨天が続いた後、急に晴れ間が出た場合などは、「葉やけ」や「しおれ」が発生しやすくなるので、日射が強い時に備えて、寒冷紗などで遮光できるよう準備しておきましょう。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆共通（排水対策）

梅雨入り前には、ほ場内外の排水路の整備・点検を行いましょう。ほ場内の周辺排水路や畦と直交の排水路は排水口に確実につなげます。鍬を使って排水路を作る場合、排水口からほ場内に向かって土を上げていくと、楽に傾斜をつけることができます。

◆かんしょ

トンネル栽培は収穫時期です。収穫は植え付け後100日目から可能となりますが、試し堀りを行い、芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植え付け後130日以上になると皮色や形状が悪くなるので適期収穫を心掛けましょう。

普通栽培では通路につるが伸びる前に通路に除草剤を散布しましょう。その時期に、黄化や萎れのある株は地際部を観察し、割れや黒変が発生したら速やかに除去します。除去した周辺の株には予防のために農薬散布を行います。

苗取りが終わった育苗床は、早めに片付けます。可能な限り育苗床に残った種いもを持ち出し、堆肥舎で堆肥化させます。持ち出しが出来ない場合は、苗床ハウス内ですき込みます。分解促進剤や石灰窒素を散布し、残渣の分解を促進します。また、土壌水分が不足している状態では分解の進行が遅くなるため、すき込み作業前に軽く散水し、土壌水分を確保した上で、すき込みを開始させましょう。

◆さといも

トンネル栽培は収穫期です。数株試し堀りを行い、重量を計り、10 aの換算収量が1トンに達した上で収穫を始めましょう。収穫が終わった畑は、近隣の生育中のさといもへの疫病伝染を防ぐため、発病の有無にかかわらず速やかにロータリー耕耘で残さをすき込みします。

畑付近の空き地に残さを放棄することは、絶対にしないでください。

疫病の発生が懸念される時期になるので、生育中のさといもは、新しい葉の展開ごとに株元までかかるように疫病予防の農薬散布を行います。

また、疫病の発生を確認したら、治療効果のある農薬の散布に切り換えます。発病極初期の散布が効果的であり、発生を見逃さないよう葉の濡れが残りやすい中～下位葉を注意して観察しましょう。

◆らっきょう

下旬から収穫期に入ります。土壌水分が多いときに収穫すると、腐敗しやすくなるので、天候に注意して収穫します。その際、ウイルスに感染した株を種球として残さないように注意しましょう。ウイルス罹病株は、葉のよじれや球が小さくびったりくっつき合い、分けにくいことで区別できます。

(川崎 佳栄)

果樹

1 常緑果樹

◆ 温州みかん

今年の開花盛期は平年並の4月下旬で、極早生品種の着花量は平年並～やや少なく、早生や普通品種では平年より多い傾向が見られました。園地や樹によるばらつきが大きいため、状況に合わせて管理を行いましょう。生理落果後、結果数が多い樹では6月中旬から荒摘果を始めましょう。

◆ かんきつ全般

梅雨に入ると、黒点病の防除が特に重要になってきます。薬剤散布から300ミリの降雨があると薬剤の効果がなくなるため、250ミリ程度の降雨があったら、次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上旬には必ず薬剤散布を行い、密度を減らしましょう。

◆ 完熟きんかん

6月下旬の1番花の安定結果は大玉生産と早期出荷を同時に実現できます。出蕾期から開花期の加温や、満開期のビニール被覆を実施し、十分な温度を確保しましょう。雨天が続く時は、昼間も28℃程度で加温しましょう。

◆ マンゴー

梅雨に入ると、炭そ病や軸腐れ病の発生が多くなります。こまめな収穫や、殺菌剤の散布等の対策を徹底しましょう。また、曇雨天日の急な強い日射により日焼けが発生する場合があります。日焼け対策の遮光ネットをこまめに開閉しましょう。

収穫が終わった施設では、剪定の作業に入りましょう。樹齢の進行と共に、収量や果実品質が低下している園では、改植を検討しましょう。

2 落葉果樹

◆ くり

安定生産のためには施肥が非常に重要です。夏肥の施用は必ず行いましょう。特に樹勢低下対策、果実肥大促進、翌年の結果母枝の充実に有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。春期1回施肥の緩効性肥料も開発されています。普及センターやJAに相談してください。

(鈴木 美里)

花き

◆ 夏秋キク

曇雨天が続いた後の晴天時には「葉焼け」の発生が多くなりますので、発生が予測される場合は、事前対策としてカルシウム剤の葉面散布等を行うとともに、当日は換気や遮光、葉水等の対策を実施しましょう。

「フローラル優香」の8月出荷作型については、正常な開花を促進するため、消灯後から2週間程度シェード(12時間日長)を実施します。また、貫生花の発生を軽減するために、過剰な施肥は控えましょう。

「精の一世」の8月出荷作型は、6月10日前後が消灯日となります。消灯後に高温に遭遇すると開花が遅れますので、日中は適宜遮光や換気を行い、夜間はシェードを開放するなどしてハウス内の高温防止に努めましょう。

◆秋ギク

白さび病等の病害対策として、健全な穂を用いた親株育成や親株ほ場における予防防除の徹底等により、罹病株を本ほへ持ち込まないように留意しましょう。

◆デルフィニウム

11～12月出荷作型では育苗作業が始まります。

早期抽だい防止のため、夜冷育苗を本葉2枚展開時から16時間、10℃で行います。なお、セル用土及び鉢土の乾燥や過湿は生育不良や徒長の原因となりますので、生かん水や施肥管理に注意しましょう。

◆ホオズキ

7月出荷作型では、着色促進のためのホルモン剤処理の時期となります。ホルモン剤は高温条件下で分解が早まることから、できるだけ涼しい時間帯に散布するとともに、散布前後数日は寒冷紗等で遮光して、ハウス内温度を下げるように努めましょう。

また、着色ムラや薬害の原因となることから、ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布は避けましょう。

◆シキミ

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染のリスクが最も高くなる時期です。病害虫による被害は商品価値の低下につながりますので、適期防除に努めましょう。

◆キイチゴ

多湿条件下ではべと病の発生が多くなりますので、定期的に予防防除を行うとともに、発生が確認されたら治療効果の高い薬剤を早期に散布することで、被害拡大の防止に努めましょう。

(藤原 明紀)

畜産

◆ 家畜防疫対策

豚のCSF（豚熱）は、四月十四日に、沖縄県の移動制限措置が解除され、その後の発生もなく、終息に向かいつつあります。これらの家畜伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物の侵入防止対策を徹底しましょう。

さらに、新型コロナウイルスの感染拡大により、畜産物価格の低下等、大きな影響が出ていますが、畜産経営では、家畜・家禽の飼養管理など毎日欠かせない作業があります。まずは、農場従事者が、感染しないように、感染予防対策を徹底しましょう。

◆ 家畜

雨が多くなり、気温、湿度ともに上昇し、家畜が暑熱ストレスを受ける時期になります。雨水が畜舎内に降り込まないようにし、換気を良くするためにカーテンの開閉をこまめに行いましょう。

子牛の下痢予防には、床を乾燥した状態にすることが重要です。敷料はこまめに交換しましょう。下痢を発症している子牛は隔離し、治療を行い、他の子牛に病気が蔓延しないようにしましょう。

乳用牛は、暑熱ストレスを受けやすく、乾物摂取量や乳量の減少等、生産性の低下につながります。このため、換気扇や扇風機等で風を牛体に当てて体感温度を下げたり、直射日光や輻射熱を抑えるために、寒冷紗等の設置、屋根への石灰や断熱塗料の塗布等を実施し、牛舎内の温度が上昇しないようにしましょう。

この時期は、サイレージが腐敗しやすくなります。カビの発生等を確認した場合は牛に給与しないようにしてください。

◆ 飼料作物

トウモロコシやソルガム等の生育期になります。長雨によるほ場の排水不良は、湿害等により飼料作物の生育を阻害しますので、ほ場に水が溜まった場合には、速やかに排水対策を実施しましょう。

(大山 佐喜子)

特用作物

◆ 茶

1 二番茶の摘採

二番茶の摘採期は降雨が多いため、雨の影響を考慮しつつ摘み遅れのないよう適期摘採に努めます。

樹勢の強い茶園は、摘採前7日間ほど黒寒冷紗等で被覆し、積極的に品質向上を図ります。被覆により、黒葉腐病・葉擦れ・葉焼け等が発生しやすいため、生葉品質の低下に注意します。

2 摘採後の管理

二番茶摘採後の整枝は、摘採の7日後頃に遅れ芽を除く程度で摘採面を整えます。さらに、近年は梅雨入りが早まり、炭疽病も多発傾向です。地区防除基準に準じ速やかに予防防除を行います。

深刈り更新は、二番茶後梅雨明け時期を考慮しつつ早めに古葉が残らない高さで実施します。また、一番茶後に中切りを行った園では、中切り55～60日後に中切り面より3cm程高い位置で1回目の整枝をします。

施肥は、二番茶摘採前後に地区施肥基準に準じ、速効性肥料を施用します。

3 チャトゲコナジラミ対策

県内全域で、茶園でのチャトゲコナジラミ発生が確認されています。本害虫の成虫は、茶の新芽に群がる習性があるため、茶園では新芽をよく観察しましょう。なお、本害虫に対する問い合わせは、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へお願いします。

(松尾 啓史)

◆しいたけ

一 伏込み地の管理

しいたけ菌は、三〇℃を上回ると菌糸生長が急激に減退し、三五℃以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、日陰が十分でない箇所には笠木等を補充しましょう。

二 ほだ場の管理

梅雨に入る前に防風ネット等の撤去、周囲の雑草木の刈払いや除伐等を行い、風通しを良くし、害菌の侵入を予防しましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、ほだ場の環境を改善するとともに、害菌・害虫の発生源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、今後均一にしいたけを発生させるためにも、ほだ回しや天地返しを行いましょう。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月は、中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。

- 1 収穫は、適熟葉収穫に努め、取り遅れや収穫ロスをなくし、完全収穫で収量確保を図りましょう。また、立枯病などの病害葉はクジリ取りを行い区分収穫に努めましょう。
- 2 収穫葉にマルチ片や土砂などが付着している場合には除去しましょう。また、取下ろし時にも異物が混入しないように心掛けて作業しましょう。
- 3 梅雨入りの時期ですが、ほ地の排水対策やほ地周辺的环境整備など耕種的病害防除を徹底しましょう。また、農薬を使用する際には、使用基準を守り、野帳・使用実績票へ正確に記帳しましょう。
- 4 乾葉の取下ろし時には、過湿・過乾に注意して荷造りを行いましょう。包を貯蔵する際には、たばこ以外の臭いを有する物を避け、貯蔵害虫の被害を受けないよう全包ビニール梱包を行いましょう。貯蔵期間中は、貯蔵庫内の適切な湿度管理に努め、品質の低下を防ぎましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病 葉いもち 穂いもち	並 —	葉いもちの発生は穂いもちの発生につながります。例年、梅雨入りとともにいもち病が発生しやすくなるので、早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入が極少量でも米の等級に影響するため、例年、被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。 また、水田内および周辺のイネ科、タデ科などの雑草やイネ科飼料作物は、出穂開花前に早めに刈り取りましょう。
普通期水稲	いもち病 葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 並	アブラムシ類は、キュウリモザイク病やタバコ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。 媒介虫は次期作におけるウイルス病の発生源になりますので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。
いちご (親株)	ハダニ類	少	平年に比べ、発生面積率および寄生株率は少ない状況となっています。親株から苗に移行・増殖するので防除を徹底します。
果樹全般	果樹カメムシ類	並	県内3か所に設置しているフェロモントラップでは、平年並の誘殺数となっています。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り、早期発見、早期防除に努めます。 特に、ウメヤナシなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 黒点病	並 並 並	黒点病は枯れ枝が感染源となるので除去に努めます。また、剪定枝をほ場周辺に放置していると、激発するおそれがありますので適切に処理します。
	ミカンハダニ ミカンハモグリガ アブラムシ類	並 並 やや多	ミカンハダニは生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病 カンザワハダニ チャノコカクモンハマキ チャハマキ チャホガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカハラムシ	並 やや少 並 並 並 並 並 やや多	新芽生育期にチャノミドリヒメヨコバイに被害されると減収、品質低下が著しいため、萌芽期から開葉初期に薬剤散布を行います。 チャノコカクモンハマキの防除適期は、発蛾最盛期の7～10日後で、チャノコカクモンハマキとチャハマキの発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能です。 チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。多発生してからは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。
1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。			
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、 http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki です。			